

JICA 中国事務所ニュース

(2007年12月号)

1. 最近のトピック

(1) 「日中の架け橋」として20年
—リハビリ研究センター王淑茗外事処長がJICA
理事長表彰を受賞—

JICAは、事業の推進に長年ご支援、ご協力を
いただいた個人や団体に対し、その尽力に謝意を表
し、ご功績を讃えるために、「JICA理事長表彰」
を毎年実施していますが、今般、中国リハビリテ
ーション研究センターの王淑茗外事処長が、受賞され
ました。今年度は全世界で、王処長を含め個人20名、
8団体が受賞しましたが、王処長はわずか3名の海
外受賞者の一人として選ばれました。

王処長は、1986年に開始された「肢体障害者リハ



王処長を囲んで表彰会

門家の受入れをはじめ、プロジェクト実施に関する
センター内の連絡調整に携われ、その後2001年か
ら開始された「リハビリテーション専門職養成プロ
ジェクト」や、来春から実施予定の「中西部地区リ
ハビリテーション人材養成プロジェクト」の立ち上
げに向けても、重要な役割を果たされてきました。
これまで王処長にお世話になった専門家は約200人
を数えますが、その日中協力にける情熱と温厚な
お人柄は、今でも多くの専門家から慕われ続けてい
ます。

11月12日の受賞式には、リハビリ研究センター
李建軍院長、中国障害者連合会代表や、これまでお
世話になったJICA専門家の代表等が列席し、古
賀JICA事務所長から感謝状と記念品が贈呈され
ました。また、日本に帰国した多くの専門家OB/
OGや国内支援機関関係者からも祝辞が寄せられ、
王処長の受賞に花を添えました。来年の新プロジェ
クトの開始、さらに秋にはパラリンピックを控え、
王処長は引き続き多忙な毎日が続きそうです。

(総括次長 岡田実)

(2) 「WAFCA 車いすバスケットボール東アジア
交流大会」を応援!

11月9日から11日、「第2回 デンソー・あい
おい 損保杯
WAFCA車いすバス
ケットボール東
アジア交流大会」
が北京市にある
中国障害者スポ
ーツトレーニング
センターで開
催されました。



11日日中代表チーム試合中

この大会は、NPO 法人「アジア車いす交流センター
(WAFCA)」と中国障害者連合会が共同で企画、開催
したものです。大会には日本、中国(2チーム)、
韓国、チャイニーズ台北の5チームが参加しました。

11月11日は最終日であり、表彰式も行われまし
た。当日約1000名の観客が会場に集まって、車いす
を駆って、ひたむきにゴールを目指す選手達に惜し
みない拍手と声援を送りました。JICA中国事務所も
WAFCAの要請を受けて、10人余りからなる応援団を
会場に送りました。我々の応援団は車いすバスケット
ボールについて、ルールなどまったく分からない
素人が多いですが、ボールの回しかたが上手だとい
うことは素人にもよく分る、本当に迫力満点の試
合でした。

三日間の試合で5チームによる総当たり戦の結果、
韓国チーム
が4戦全勝で
優勝を飾り
ました。日本
チームは第2
位で、チャイ
ニーズ台北
チームは第3
人を、中国2
チームは



リハビリテーション研究センター訪問中

それぞれ第4位と第5位でした。でも、優劣の区別
がこの大会の目的ではなく、各国の選手が試合を通
じて大いに友情と交流を深めることが真の目的でし
た。2008年パラリンピック開催を控えている北京市
で本大会を行ったことは、特別な意義があると思わ
れます。

大会が終わった13日、日本チームの代表が日本の
政府開発援助(ODA)で建てた中国リハビリテーショ

ン研究センターを訪問しました。訪問者は当研究センターの幹部と会談し、施設を見学し、リハビリ中の患者の方々とバスケットを通じた交流も行いました。当日は、日本大使館の香川公使、若林書記官、JICA 中国事務所の岡田次長も同席しました。今回の訪問は日中マスコミの注目を浴び、NHK、中国新聞社、北京青年報、新京報などの記者も取材に同席し、日本チーム代表の前川信親氏及び関係者へのインタビューも行われました。当研究センターは近代的な総合リハビリテーションセンターを目指して、JICA との技術協力関係を長年続けてきました。

WAFCA の中国での事業開始に当たっては JICA 中国事務所 NGO デスクも支援を行っています。2005 年春、NGO デスク担当者は WAFCA に中国でのパートナー機関——北京市障害者連合会を紹介しました。このきっかけにより両者の協力事業が始まりました。今後 JICA は引き続き両者の協力事業を注目し、応援していく予定です。（相互理解班 周迎）

（3）新たな展開を見せる法整備分野案件

中国での法整備支援は、まだ新しい協力分野ですが、11 月は今後の展開に向けての動きがありましたのでご紹介します。

1. 民事法・仲裁法プロジェクトの開始

11 月 2 日に、技術協力プロジェクト「民事訴訟



法・仲裁法改善プロジェクト」の R/D 署名式が JICA 事務所で行われました。全人代法制工作委员会弁公室の高志新主任が出席し、古賀所長と

新しい法律分野の協力の幕開け署名を取り交わしました。

このプロジェクトは、中国において今後民事訴訟法や仲裁法が改正されるため、日本に対して支援が求められ、3 年間のプロジェクトとして開始されたものです。11 月 12 日～21 日にかけては第 1 回目の訪日研修を行い、全人代と最高人民法院からの 8 名の研修員が法務省等を訪問しました。法務省では事務次官が研修員に直接対応するなど、日本側の注目度も大きいプロジェクトです。

「民事訴訟法」とは、企業や個人が主に契約違反等の争い（「民事紛争」と言います。）が生じた際、どのように裁判所で解決するか、その手順を定めた法律です。一方、仲裁法は、民事紛争を裁判所ではなく、中立的な第三者により解決してもらい、それ

に裁判所の判決と同様の効力を与える、より迅速な紛争の解決方法を定める法律です。経済が発展するためには裁判や仲裁において、民事紛争が正しく、効率的に解決されないと個人や企業は安心して取引を行うことができません。これからの中国の更なる経済発展を支えるという意味でこれら手続法の整備は大きな意義を持ちます。

このプロジェクトは、日本側は法務省法務総合研究所を中心に実施し、委員長である一橋大学の上原敏夫教授を始めとする錚々たる顔ぶれの国内支援委員会が立ち上げられています。今後、3 月の現地セミナー、長期専門家の派遣、訪日研修が予定されており、高いレベルの法的支援が実現できるべく、案件を進めていきます。

2. 経済法・企業法プロジェクト終了時評価実施

11 月 18 日からもう一つの法整備支援プロジェクトである「経済法・企業法整備プロジェクト」の終了時評価を実施しました。11 月 30 日に商務部において合同調整委員会が開催され、終了時評価の結果が確認されました。市場経済が進展する中国において、経済の主体である企業の法的根拠を整理し、また消費者のために公正な競争、取引が行われることを目指したこのプロジェクトは、2004 年 11 月から開始され、中国の公司法（会社法）、独禁法、市場流通関連法分野において、訪日研修、セミナー、研究会を実施してきました。2006 年の中国の公司法の改正、また今年度の中国の独禁法の制定、また様々な市場流通関係の法令の制定にあたり、このプロジェクトの成果が発揮され、研究会やセミナーでの日本の専門家の発言、訪日研修での資料が活用されました。終了時評価では、商務部、国务院、全人代、証券監督管理委員会といった中国政府の立法を担う中枢部から、本プロジェクトの意義と謝意が強調され、今後の協力の継続が求められました。それに応える形で、独禁法部分について 2009 年 11 月までの延長を提言し、また市場流通法について延長が可能か検討することになりました。

このプロジェクトは 2001 年に対中経済協力計画が制定された際、改革開放支援が援助重点分野とされ、その具体的案として JICA から中国側に提案してできたプロジェクトです。当初は日本側に政治体制の異なる中国に対し法整備支援ができるのか疑問視する声があり、また、同様に中国側にも、欧米ではなく日本から法整備支援を受けることの効果に懐疑的な見方もあったとのことですが、3 年経った結果、中国から非常に大きな賞賛を受ける結果となりました。その要因は様々なものがありますが、JICA の窓口になった商務部の高い調整能力と、日本側のリソースがしっかりしていた点が特に挙げられると思

まず、経済産業省、公正取引委員会、国内支援委員会の先生方のご尽力により、このようなよい結果を生み出せたと言えるでしょう。

今後の延長期間は、2008年夏までには決まる予定の独禁法の執行機関に対する支援が主な内容になりますが、中国において公正な競争が推進されるよう、延長期間も内容の濃い案件にしていきたいと考えています。

以上のように、11月は法整備支援分野での動きがあった月でした。経済法プロジェクトの終了時評価では、新しいプロジェクトの立ち上げを提案する中国側の部門もあり、今後のニーズの大きさを示し、今後の新たな展開を予感させました。国の根幹と言える法整備支援において日中が協力する意義は非常に高いと考えられます。今後、中国の法整備支援を拡大、充実させたいと思っています。

(プロジェクト担当 大久保晶光)

(4) 玄界灘を越えた「草の根」水道協力

—大連・北九州市水道技術交流会開催—

11月22日、大連市内のホテルにおいて、「大連・北九州市水道技術交流会」が開催され、大連市水務局、科技局、外事弁公室、大連市自来水集团有限公司、大連市経済開発区自来水公司、北九州市、当事務所などからの関係者、技術者約70人が出席しました。

大連市と北九州市は、1979年に友好都市関係を結び、以来、環境分野の技術協力や経済文化交流等のさまざまな活動を進めてきました。JICAは2001年から、「草の根技術協力事業」を通じて、水道技術の向上



大連市水務局譚副局長と北九州市北橋市長

に関する両都市間の技術協力を支援してきましたが、本交流会は、3年間のプロジェクトを総括するものです。

交流会の冒頭挨拶に立った大連市水務局譚副局長及び北九州市北橋市長からは、友好都市関係にある両市の協力の発展、本プロジェクトの成果を高く評価し、またJICAの協力を謝意が表されました。また、大連市側から、これまで北九州市側専門家6名が大連市の「星海友誼賞」を受賞した旨、紹介がありました。大連市及び北九州市は、これまで得られた成果をさらに周辺の地域へ拡大していきたいとの意欲

が示されており、玄界灘を越えた「草の根」水道協力は、今後もさらに発展が期待されます。

(総括次長 岡田実)

(5) SARSの経験と教訓を共有

第二回日中院内感染対策高級セミナーが広州で開催
12月5日～7日、広東省広州市において、「第二回日中院内感染対策高級セミナー」が開催されました。「広州市院内感染対策プロジェクト」の実施機

関である広州医学院第一付属医院、広州呼吸疾病研究所、広州市疾病コントロールセンター、JICA専門家チームをはじめ、全国か



院内感染対策高級セミナー

ら医療関係者約200名が出席し、開幕式には、広州総領事館の吉田総領事が列席され、ご挨拶をいただきました。また、中国で活動する青年海外協力隊看護士隊員6名も各地から駆けつけ、院内感染に関する知識を深めました。

本セミナーには、短期専門家として、国立感染症研究所の岡部感染症情報センター長、国立病院機構仙台医療センターの西村病因研究室長、国立国際医療センターの切替感染症制御研究部長らが派遣され、日本における経験、研究成果等を発表する一方、中国側の専門家からも、中国の取り組み、研究成果等が発表されるなど、日中の知見が交換されました。また、本セミナーにおいて、頼副院長から、「JICAプロジェクトの成果紹介」として、本プロジェクトの成立までの経緯、プロジェクトの活動内容、これまでの成果等について約1時間にわたり詳細かつ分かり易い報告があり、セミナー出席者に深い印象を与えました。

広州市と福岡市が友好都市関係にあることから、研修員が地元のテレビ・新聞で大きく取り上げられるなど、技術協力にとどまらず、両国間の相互理解の増進にも大きく貢献したことが見て取れます。プロジェクトは2008年12月まで継続しますが、広州市のSARSの経験と教訓が、さらに多くの医療関係者に共有されることが期待されます。

(総括次長 岡田実)

(6) 中国安全生産科学技術能力強化計画プロジェクト第1回合同委員会及び中日安全生産プロジェクト報告会の開催

2007年11月28日、「中国安全生産科学技術能力強化計画プロジェクトの第1回合同委員会及び報告会」が中国国家安全管理監督総局において開催され、同局並びに安全生産科学研究院、



調印式

本溪、寧波地方の代表等約30名が出席、JICA中国事務所からは古賀所長が出席しました。

本会議では、プロジェクト開始後1年間の成果について報告があり、また2年目の計画について話し合われました。会議には、安全管理監督総局の孫副局長及び日本大使館の香川公使も列席され、孫副局長からは安全監督総局に対し、今後よりプロジェクトへの支援を強めるよう力強いメッセージがありました。また、会議直後に古賀所長と柏国際合作司長との間で協議議事録に署名を行ないました。

(プロジェクト担当 馮威)

(7) 涼山州西昌市のエイズ予防イベント

去る12月1日のエイズデーに、ここ涼山州西昌市内の月城広場で、私の配属先である州赤十字会と、州政府エイズ予防事業委員会弁公室らの共同開催により盛大なエイズ予防イベントが催されました！

エイズは中国においても依然厳しい感染状況が続いており、今年のエイズデーを前に中国政府は国内のエイズウイルス(HIV)感染者が70万人、発症



エイズ予防イベント参加の衆民

者が8.5万人であることを明らかにしました(2007年10月末現在)。ここ涼山州も中国におけるHIV/AIDSの流行地域であり、中国政府だけでなく州赤十字や、その他国内外のNGOも数多くエイズに関する知識の普及・予防教育活動を行っています。中国では近年、薬物使用者・売買春層などのハイリスクグループから、一般の人々への感染が広まる傾向

にあります。涼山州は現在麻薬常用者による感染が多くを占めていますが、今後は一般大衆を対象としたエイズ予防啓発活動が非常に重要になってくると思われます。

さてイベント当日は、パンフレットの配布(印刷代の一部をJICAの現地業務費より補助)、涼山民族中学・涼山農業学校合同の日本語クラスの学生によるエイズ予防啓発ポスターの掲示、血圧無料測定、健康相談コーナー、クイズ大会、赤十字ボランティア芸術団によるエイズ予防劇などが行われ、道行く人々が足を止め大盛況でした。

またイベントを利用して一般大衆のエイズに対する知識率と意識の調査を行いました。現在、結果を集計中ですが、基本的知識を理解しエイズは誰でも感染の危険性があると知っていても自分には起こりえないと感じており、知識と意識の差が生まれていたり、逆に中途半端な知識でどこかあやふやなところがあるために、必要以上の恐怖心を抱いている人も少なくないように感じました。予防の第一歩は正しい知識の習得ですが、その知識を行動に移せなければいけません。エイズ患者への偏見をなくすることも行動変容の一つです。

州赤十字会としても、ピアエデュケーション活動に加えて、一般大衆の知識から行動へと人々の認識を変えていくことへ焦点をあてた活動ができればと考えているようです。

(ボランティア調整員 渡邊憲夫)

(8) 青年研修訪日感想&「鳥取オヤジ」との出会い

11月13日から30日まで、私は青年研修事業「環境行政」訪日団の一員として、日本を訪れました。

光陰矢のごとし、あっという間に過ぎました。18日間の研修生活を振り返ってみると、大いに収穫がありました。私たちは、鳥取県における汚水処理場、ごみ処理場、風力発電所など環境関連施設を見学し、王子製紙工場やリサイクルショップなど企業を訪れ、

鳥取環境大学、鳥取大学乾燥地研究センター、鳥取衛生環境研究所、羽合小学校などの科学



青年研修訪問団の合影

技術研修所及び教育機関との交流を行いました。これによって、日本の行政、企業、学校と一般市民が

どのように協力し合って環境保護活動を行っているかを学習し、日本における環境保護分野の経験に関する認識を深めました。専門知識の研修のほかには、鳥取の豊かな自然環境も充分堪能しました。砂丘、大山や温泉など、日本の美しい自然風景と古きよき伝統文化を体験し、その魅力をしみじみと感じました。受け入れ団体である鳥取青友会の行き届いた手配の下で、多様な方式の交流活動を通して、様々な角度から知識を身に付け、視野を広げ、非常に充実した有意義な研修生活を過ごしました。

この18日間の体験で私にとってもっとも印象深かったのはホームステイです。普通の日本人と一緒に食事したり、働いたり、長い夜話に夢中になったり、美しい景色を楽しんだりしながら、お互いに親しみが感じられ、見えない心の絆で結ばれた気がします。私も不思議な縁に引かれて、「鳥取オヤジ」との「運命の出会い」を体験しました。

本当に不思議なご縁ですが、私のホームステイのご主人が「鳥取オヤジサミット」の実行委員会の委員長であったため、その活動のボランティアとして参加させてもらいました。「オヤジサミット」って、面白いタイトルですね！初めて耳にした時、オヤジだけ、男だけ、単なる飲み会かなあというイメージが強かったため、具体的にはいったいどんな活動を行うのかなかなか想像にもつきませんでした。実際に参加してみたら、大変面白くて楽しかったです。

今回のテーマは「オヤジの出番～オヤジパワーで家庭が変わる・子供が変わる～」です。鳥取に限らず、京都、広島のおヤジ代表もわざわざ参加されました。各地代表のおヤジ数十名は、



オヤジサミット

子育てや学校教育や家族の役割など、いろいろな課題について、熱心に検討を行い、知見をシェアしました。普段、PTA活動ではなかなか顔の見えない「オヤジ」たちは、自分の力で子供が変わり、家族が変われば、地域社会が必ず良い方向に向かうと信じています。このような活動を通じて、「オヤジたちのやさしさ、たくましさ、誠実な心が、子供たちが健やかに育つための大切な糧なのです。子供たちのシェルターなのです。このシェルターで子供たちを包み込んであげれば、どんな難関にあってもへっちゃらになる」という信念は、より多くの人の中に広がっていくのだと思います。

交流会の際、簡単な挨拶をさせていただくチャンスもありました。そのとき「一日の内で、こんなにたくさんのおヤジとお会いできて、本当に嬉しいです！」と思わず本音を吐き、一座を大笑いさせました。その後、たくさんの方が次から次へと私に話しかけてきて、中国のことをいろいろ聞いてきたり、「今度、うちにホームステイしてください」などと熱く招請してくれました。オヤジたちの元気さ、情熱に感動、私は一生忘れられない一日を過ごしました。

「オヤジサミット」との出会いによって、日本のオヤジたちのパワーと可愛さを感じると同時に、日本市民社会の進歩も身をもって体験しました。オヤジたちがいろいろな小さい組織を立ち上げ、身近なことから、家族やコミュニティに対して自分なりの貢献をすることには、非常に素晴らしいと思います。このような活動を通じて、地域社会に貢献するとともに、自分自身もより一層「存在感」と「価値観」を感じられるとオヤジたちに教えてもらいました。この経験は、現在、調和の取れた社会を築こうとしている中国にとってもいい参考になると思います。

18日間の研修は無事に終了しました。鳥取の大山、砂丘など豊かな自然環境、そして、純粋で素朴な友情と厚いよしみは心の中に深く浸み込みました。時々オヤジたちのホームページを通じて最新情報を見ることがありますが、依然としてみんなのパワーを感じます。ご興味あればぜひ見てください！一緒に中国から応援しましょう！

(相互理解班 王莉)

「ホエホエオヤジ」のHPアドレス

<http://yellow.ap.teacup.com/applet/hoehoe/200712/archive>

2. 人の動き

(1) 主な調査団(派遣中・派遣予定)(12月)

経済法・企業法整備プロジェクト終了時評価
(11/18-12/3)

中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト第2次事前調査(11/19-12/29)

甘肅HIVエイズ中間評価調査(12/2-12/20)

首都周辺風砂被害地域植生回復モデル計画調査
(11/4-12/25)

商業統計プロジェクト調査団及びセミナー
(12/9-15)

3. 9月の主要行事

なし

4. 専門家・ボランティアコーナー

(1) 銀川で餅つき!

11月3日～4日に銀川市の寧夏大学で『中日文化友好交流節』が盛大に行われました。このイベントは寧夏大学で日本語を教えている隊員が中心となり実施され、他の銀川隊員や比較的任地が近い内モンゴルの隊員も手伝いに駆けつけました。当日は、寧夏大学の日本語を専攻している学生はもちろん、他の専攻の学生、他の大学の日本語を専攻している学生など、会場となったホールは満員状態。カラオケコンテス



作務衣姿でもちをつく小河原隊員

トでは日本の演歌を切々と歌い上げる学生、生け花体験では見よう見まねでこれまでにない生け花をいける学生、剣道体験では竹刀をブンブン振り回しながら「面」を狙う学生、初めて着る浴衣にポーズを付けて写真を撮りまくる学生など、学生が参加し、楽しめるイベントとなっていました。

なんと寧夏の人民政府には臼と杵があり、日本料理体験ではそれをお借りして餅が振舞われました。準備のほとんどは学生が主体となっていたのですが、餅つきなんてもちろん初めて。どうしていいのか分からずてんやわんや。ここは日本人の私が手本を見せねばと思いましたが、餅つきなんて子供のころ以来していません。そんな私も学生の外側であれが足りない、これが足りないというだけで、てんで役に立ちませんでした。そんなときに登場したのが、剣道体験のために北京からわざわざ来てくださった剣道同好会の方。さすが年配の方だけあって、てきぱきと指示します。準備されていた材料は中国なので日本で使われるものとちょっと違いますが、そこは工夫して、なんとか餅の形になりました。学生はカレーライスとチラシ寿司を食べた後だったのにもかかわらず、餅は次々と学生の胃袋に消えていきました。私もいただきましたが、十分おいしい銀川での餅つきでした。

(ボランティア調整員 渡邊憲夫)

(2) 湖南まつりの開催

湖南省の省都 長沙で毎年秋に行われる日本語コンクールは、青年海外協力隊日本語教師が提案し、湖南省科技厅と湖南省教育厅とが主催して始まった、省レベルの日本語コンクールです。このコンクール

の目的は「湖南省全体の日本語教育の振興とレベル向上を目指す」とこと、「日本語学習者の創造性と主体性を育成する」こと。湖南省が内陸に位置しており、沿岸部に比べると日本語レベルが低いので、レベルアップのために、日本語教育関係者が力を合わせ、このコンクールを盛り上げています。

今年で4回目の開催になりますが、現在は、湖南省で日本語教育に携わる中国人教師と日本人教師が実行委員会を作って運営、また、学生による実行委員会が、文化的活動、イベントなどを実行しています。

長沙の大学が持ち回りで開催場所を提供していますが、今年の開催は、中南林業科技大学。長沙の南部にある林業系大学で行なわれました。

今回、このコンクールに審査員として参加しましたが、同様に審査員として参加された方が、長沙の日系スーパーの方や、日系自動車部品の方、また、大学の先生や国際交流基金の方。いろいろな立場の多くの方々によりこのコンクールが出来上がっていることを実感しました。

また、その多くの立場の方々の間を調整している青年海外協力隊員。生徒を引率して参加している青年海外協力隊員。審査員として参加している青年海外協力隊員を見て改めて青年海外協力隊員の活躍ぶりに頼もしさを覚えました。

スピーチの題材は「バカップル」を取り上げたものや、「中国国内の格差」を取り上げたものなどバラエティーに富み、飽きさせません。ただ、しっかりしたコンクールだけに学校間の



鮮族のスピーカー

競争も激しく、スピーチのあとの審査員の質問が難しすぎると所属校関係者からブーイング。簡単すぎると他の学校関係者からブーイング。審査員の仕事はなかなか大変でした。

今年で4回目を迎え、恒例行事としてしっかり定着した感のある湖南省日本語コンクール。このコンクールにより湖南省の日本語教育はますます盛んになっていくことでしょう。

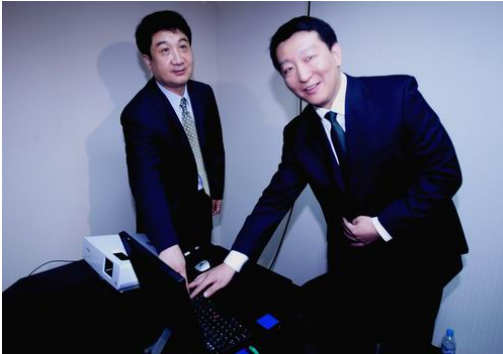
(ボランティア調整員 古川寛)

5. 中国の動き

第二次オリンピックチケット販売が再開！

10月30日から開始され発売直後からシステムがダウンしたために延期されていた、第二次オリンピックチケットの販売が12月10日から再開されました。先着順かつ枚数制限なしだった当初案に比べ、1人2種類までの制限がついた抽選形式に変更され、12月30日までの間、インターネットや窓口などでの申し込みを受け付けるそうです。

10月30日は朝から晩まで窓口で長蛇の列、電話及びインターネットはつながらないとい



第1次抽選の様子

う状況だったそうですが、この日に何とか買えた9000枚のチケットは有効とのこと。第1次販売では、1人20種類まで（*注：主申し込み10件、予備の申し込み10件の合計20件）の申し込み制限がありましたが、事務所の中でも、1人で何件か当たった人と全く当たらなかった人に明暗が分かれました。正式発表では70万人を超える人から出された申し込み数（最大1400万件分？）の中から、どのような形で当選者を決めたのか、抽選の具体的な方法は不明ですが、あまりにも申込者が多かったために、1人でも多くの人に広く浅く券を配分するというよりも、ある程度数を絞って、1人に複数枚の券を配分するというような結果になったようです。

なお、第1次販売では、中国銀行の口座から自動引き落としがされるはずであったのに、何らかのトラブルで引き落としがされず、直接窓口払い込みに行かなければならない人も多かったようです。

今回再開された第2次販売ではあまりトラブルがなければいいのですが、すでに発売2日で10万人から申し込みがあったそうですので、今後もスムーズな販売がなされるかどうか、要注意です。

（主査 植村吏香）

6. その他のお知らせ

* 専門家、ボランティアの方々からの情報提供、大歓迎です。また、本紙に対するご意見、ご提案などもいただければ幸いです。いずれも中国事務所 **沈 曉 静** (shenxiaojing.cn@jica.go.jp) へてにお願いいたします。